

【論文】

コーパスを用いた外来語サ変動詞の分析

——「マークする」を例として——

茂木俊伸

A Corpus-based Study on Loanword Verbs in Japanese: A Case Study of *maaku-suru* (<mark>)

Toshinobu Mōgi

要旨

This study aims to analyze in detail the polysemous loanword verb *maaku-suru*. The study analyzes the meaning and construction of *maaku-suru* based on examples from the Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese (BCCWJ) and demonstrates the need and potential for conducting research on the grammatical characteristics of loanwords.

First, the paper summarizes explanations of *maaku-suru* from dictionaries and Japanese language teaching materials and identifies problems related to these explanations. Next the study analyzes the semantic and grammatical characteristics of *maaku-suru* based on examples from the BCCWJ and demonstrates the existence of a corresponding relationship between them. Lastly, the paper analyzes the meaning of *maaku-suru* in comparison with the synonymous expressions *maaku o tsukeru* and *kiroku-suru*.

キーワード：外来語、カタカナ語、サ変動詞、多義語、文型、コーパス、コロケーション

1. はじめに

本稿では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下、BCCWJと呼ぶ）のデータに基づき、外来語サ変動詞「マークする」の語彙・文法的特徴について分析を行う。

以下では、まず、本稿の問題意識を述べたうえで、外来語辞典や日本語教材におけるこの語の記述を検討する（第2節）。次に、BCCWJにおける「マークする」の用例に基づいて、この語の意味的特徴と構文的特徴を記述する（第3節）。さらに、類義表現「マークをつける」「記録する」と「マークする」との比較を行う（第4節）。

2. 「外来語の文法」研究という視点

本稿で分析対象とする「マーク（する）」は、澤田（1993）で指摘されているように、サ変動詞用法を持つ基本的な外来語であると考えられる。

現代日本語の外来語（カタカナ語）研究の課題として、既に日本語に定着していると考えられる基本的な語に関する分析が遅れているという点が指摘される（cf. 石野1996、金2011など）。このように、そもそも個々の外来語が文中で具体的にどのように使われるかを明らかにする語彙的・文法的研究が手薄であることから、例えば日本語教育の分野では外来語が学習の困難点になることが繰り返し指摘されているものの、問題解決に必要な基礎的情報が不足した状態にあると言える。本稿の分析は、日本語教育への応用を目指した外来語研究の一環として行うものである¹⁾。

このような問題意識の下で、「マーク（する）」に関する従来の記述を見てみる。次の(1)は、『コンサイスカタカナ語辞典（第4版）』（三省堂編修所2010）の記述である（一部、記述の省略やレイアウト等の変更を行っている）。

(1) マーク [mark] ～する

- ①印、目印。記号、(特徴的な) 記章。
- ②商標。
- ③印をつけること。
- ④〔ラグビー〕フリーキックまたはペナルティーキックが与えられる地点。
- ⑤〔スポーツ〕(記録・成績などが) ある基準に達すること、ある線以上に達すること。
- ⑥(スポーツで) 相手チームの特定の選手にねらいをつけ、その選手が力を発揮しにくいようにすること。転じて、一般に、特定の人物または商品などを、何らかの目的の下に監視すること。
- ⑦(略)
- ⑧〔ボウリング〕ストライクまたはスベアをとること。また、その時の記号。
- ⑨〔ゴルフ〕グリーン上でボールを拾い上げる時に、ボールの位置を示すために目印(コインなど)を置くこと、また、その目印。(同: 1079)

(1)の記述からは、「マーク（する）」の専門用語としての用法まで細かく確認することができる。しかし、日本語の産出という観点から見れば、どの語義でサ変動詞用法を持つのが明記されておらず、語釈から推測するしかない。

次に、日本語教育用の教材を見る。佐々木（2001）は、管見のかぎりこの語の最も詳細な記述がなされている教材であり²⁾、次の(2)のように、すべての語義で他動詞として用いられることが明示されている（例文のルビと英訳、関連語の情報は省略した）。

(2) マーク <mark> 他動 名

- ①印をする。印。[一する／一をつける]
 - ・該当する箇所にマークをつけてください。 名
- ②記録や成績を達成する。[一する]

・今回の大会で佐藤選手は自己最高記録をマークした。[動]

③目をつける。[(…を) —する・ (…に) —される]

・彼は事件のカギを握る人物として警察にマークされている。[動]

(同：87)

ただし、(2)の記述では、「マークする」が他動詞として典型的にどのような(タイプの)名詞をヲ格にとるのは明確ではなく、例文から推測するしかない。また、語義③には、受身形の文型と例が挙げられている(安藤ほか2014も同様)。これは他の語義にはない形である。小宮(1997)では、この意味の「マークする」の理解度が低いことが指摘されており、もし受身形が語義③に特有のものであるならば、日本語学習者にとっては、多義語である「マークする」の意味を判別する際の形の手がかりが得られることになる。

以上のことから、茂木(2011、2012)、Mogi(2012)で述べたように、外来語の分析においては、意味記述だけでなく文法的な側面を合わせた「意味と形式の対応関係」に関する情報を示すことが必要であると言える。このような視点を、ここでは「外来語の文法」研究と呼ぶ。これは、より具体的には、例えば「マークする」のようなサ変動詞であれば、語義や用法の分類ごとに、自動詞と他動詞のどちらなのか、共起する格成分や文末形式に違いはあるか、(2)の語義①に見られる「マークをつける」のような類義の表現(cf. 村木1982)はあるか、といった分析を行っていくものである。

ただし、このとき具体的にどのような文法的特徴をどこまで記述すべきなのかは、言語直感のみでは十分に検討することが難しい。したがって、「外来語の文法」研究では、言語使用の実態に基づいて、まずは文中における外来語のふるまいを実証的に明らかにしていくことになる。

3. 事例研究 —「マークする」の分析—

前節に示した考え方を踏まえ、以下では、事例研究として、BCCWJの用例をもとにサ変動詞「マークする」の分析を行う。まず、「マークする」の意味分析を行い(3.1節)、次にこの動詞がどのような格成分や文末形式を伴って構文を形成しているのかを見ていく(3.2節)。

分析対象は、2013年5月に『中納言』(バージョン1.0.5)を使用して得たBCCWJの「マークする」の用例374例である。ここで扱った用例は、「マークする」および「マークできる」の各活用形の例と、「30勝をマーク。」のような、「マーク」に句読点や記号(!?…)が直接続く例である³⁾。また、「徹底マークする」のような「漢語+マーク」型の複合名詞も、意味から判断して分析対象に含めている。

3.1 「マークする」の意味的特徴

BCCWJにおける「マークする」の用例を意味的に分類すると、次ページの〔表1〕のようになる。ここでは、辞書類も参考にしながら、語義 [1] ~ [4] を立てた(提示順は辞書に準じている)。

それぞれの語義は、おおよそ、“(書いたり塗ったりして) 印を作り、ポイントがそこであることを示す”(語義 [1])、“人が(意味のある) 記録を作る・打ち立てる”(語義 [2])、“人が対象に注目し、継続的にその動向に注意を払う・警戒する”(語義 [3])、“人が対象の後や周りに貼り付く(ことでその動きを封じる)”(語義 [4]) のように定義できる。これらに共通する「マークする」の中核的な

〔表1〕BCCWJにおける「マークする」の意味分類

語	義	用例数
[1] 印を作る	[場所] を塗りつぶす／強調する [場所] に印をつける	51
[2] 記録する	[数字] (成績) を達成する [記録] を打ち立てる	180
[3] 注意する	[人・モノ] に注目・注視する [人・モノ] に注意を払う・警戒する	64
[4] 人に付く	[人] を尾行・追跡する [選手] に付いて動きを封じる	79
計：		374

意味は、「注目すべき対象を作る」のようなものと考えられる。

それぞれの語義の具体的な用例を、次に挙げる（出典はBCCWJのサンプルIDで示す）。

(3) 語義 [1]：印を作る

- a. とにかく文書を直す箇所をマークする、どの文書が印刷に必要なのか、その準備を全部私がやっちゃっておきたい。(OY14_49757)
- b. 2サイズ以上大きめのサイズに、エスニックなベルトでウエストをマーク。(PM11_00996)

(4) 語義 [2]：記録する

- a. 昨年、長崎県で行われた全国中学大会の覇者。「暑いところの方が得意」という通り予選で自己ベストの十二秒07をマーク。(PN1e_00003)
- b. 白幡は得意の五千メートルで6分三十三秒54の大会新をマークして1位となり、2位の糸川敏彦（コクド）とともに、五輪代表をほぼ確実にした。(PN1m_00015)
- c. 今シリーズも前シリーズに引き続いて高視聴率をマークし、好調の『新キッズ・ウォー』。(PM51_01062)

(5) 語義 [3]：注意する

- a. 活躍間違いなしの白いバッグをマーク！合わせる色を選ばないうえ、おしゃれ度もピカイチ。春は白バッグ旋風が巻き起こりそうな気配濃厚！(PM51_00199)
- b. [住友重機] は、このところ、かなり高くなっており「そろそろ売りでは」と、マークしていた銘柄だ。(PB33_00700)
- c. 今、われわれが、犯人として、マークしているのは、山本です。(LBq9_00258)

(6) 語義 [4]：人に付く

- a. でも、乃木ありさは、石黒が徹底的にマークしているはずである。マークしていながらここへ来たというのは、石黒をうまくまいたためだろうか。(LBf9_00120)
- b. 中村俊輔がマークされるのであれば、彼がおとりになって遠藤にゲームを作らせた方がよかった。(OY15_10654)

このうち語義 [3] の「マークする」は、対象の行為や変化によって何らかの利益・不利益が生じる、という予測の下で対象の動きに「注意する」ことを表すのであるが、『例文で読むカタカナ語の辞典（第3版）』（小学館辞典編集部1998）で「良い意味にも悪い意味にも用いられる」（p.601）とされているとおり、(5a) のように「注目する」と言い換えられるプラスのニュアンスを伴う例、(5c) の「疑って警戒する」のようなマイナスのニュアンスを伴う例、さらには (5b) のように文脈を見てもどちらか明確でない例が見られる。

なお、本稿の分類では、語義 [3] と [4] を、便宜的に、「マークする」主体の移動を伴うかどうかで分けている。文脈上、「マークする」主体が対象にあわせて移動していると判断できる例（例えば (6a)）は語義 [4] に、このような移動の有無が明確ではない例（例えば (5c)）は、語義 [3] に分類した。したがって、意味的に見て、語義 [3] と [4] は連続性を持つ（後の 3.2 節で見られるように、両者には構文的要素にも共通する点が多い⁴⁾）。

次に、これらの語義 [1] ～ [4] の用例の分布を BCCWJ のサブコーパスごとに示すと、次の〔表 2〕のようになる⁵⁾。〔表 2〕の右端の「PMW」は、各サブコーパスにおける100万語（短単位）あたりの「マークする」（サ変動詞語幹「マーク」）の頻度を示したものである（右下の合計欄の PMW は BCCWJ 全体から見た値。以下同じ）。

〔表 2〕サブコーパスごとの「マークする」の出現

	語義[1]	語義[2]	語義[3]	語義[4]	計	PMW
出版・書籍	23	35	18	27	103	3.61
出版・雑誌	13	36	2	10	61	13.72
出版・新聞	0	40	2	0	42	30.65
図書館・書籍	8	8	20	25	61	2.01
特定目的・ベストセラー	0	0	3	2	5	1.34
特定目的・広報誌	0	1	0	0	1	0.27
特定目的・知恵袋	5	0	10	3	18	1.75
特定目的・ブログ	2	60	9	12	83	8.14
計：	51	180	64	79	374	3.56

〔表 2〕から、「マークする」は単純な頻度で見た場合、書籍やブログといった媒体でよく使われるように見えるものの、PMW は新聞が最も高いことが分かる。また、語義 [2] の用例自体はさまざまな媒体に見られるが、新聞の「マークする」の例はほとんどが語義 [2] である。この新聞の語義 [2] の40例はすべて、先の (4a-b) のような、スポーツに関する記事における用例であった⁶⁾。

3.2 「マークする」の構文的特徴

次に、3.1 節で示した語義ごとに、共起する連用成分や文末形式といった「マークする」の構文的特徴を見ていく。

3.2.1 連用成分

まず、「マークする」がどのような格成分や副詞的成分と共起するのを見る。次の〔表3〕は、5例以上見られた「マークする」の共起成分を挙げたものである（パーセンテージは、その語義の用例に占める共起の割合を示す。ただしヲ格とニ格との共起例では注7に示す補正を行った）。

〔表3〕「マークする」の共起成分

語義	用例数	格成分							副詞的成分		
		ヲ	ニ	道具デ	場所デ	期間デ	時ニ	トシテ	時	期間	様態
[1]印を作る	51	23 51.1%	14 31.1%	9 17.6%						1 2.0%	
[2]記録する	180	168 100%			44 24.4%	8 4.4%	27 15.0%		12 6.7%		
[3]注意する	64	16 32.0%	1 2.0%					6 9.4%		7 10.9%	6 9.4%
[4]人に付く	79	36 51.4%	5 7.1%					1 1.3%		10 12.7%	13 16.5%
計	374	243	20	9	44	8	27	7	12	18	19

まず、対象がヲ格として現れない場合⁷⁾を除くと、「マークする」は374例中243例（65.0%）でヲ格成分と同一文中で共起している。特に語義〔2〕ではすべての例でヲ格名詞と共起しており、必須成分となっている。この時のヲ格名詞は、「5連勝」のような〔具体的数値〕の場合と、「世界新記録」のような記録の〔種類を表す名詞〕の場合がある。また、先の(4a-b)のように、「の」を介して両者が共起している例も見られる。一方、語義〔3〕と〔4〕のヲ格名詞は、ほとんどが〔人〕を表すものであった⁸⁾。

また、語義〔1〕では、次の(7)のようにニ格成分と共起する例が一定数見られる。このニ格名詞は場所的であり、(7b)のように「〔場所〕に〔印となるモノ〕をマークする」という形でニ格とヲ格が共起する例も3例見られた。語義〔3〕〔4〕にも、少数ではあるが、(7c)のようなニ格名詞との共起例がある。

- (7) a. だいたいあの本木が間違えて印をつけたからいけないのだ。 間違っただうに マークしていたのがそもそもの原因だ。
(LBt9_00100)
- b. 横線を引きたい 文の切れ目に ‘単独で’ タグ〈hr〉をマークします。
(PB35_00263)
- c. そしてその前線へのパスの供給源である 中田に も、張亨碩が激しくマーク。
(LBm7_00043)

共起する格成分でこの他に特徴的なものとして、語義〔1〕に見られた道具デ格（例：「赤ペンで」「ベルトで」((3b))）、語義〔2〕に見られた時のニ格（例：「昨年6月に」）、場所や種目名を表すデ格（例：「プラハ国際で」「五千メートルで」((4b))）、期間を表すデ格（例：「2年間で」）、そして語義〔3〕に見られた複合格助詞トシテ（例：「犯人として」((5c))）が挙げられる⁹⁾。

また、副詞的成分では、「今季／00年」のような時を表す表現が語義 [2] に、「最後まで／常に」のような期間を表す表現と、「びったり (と) / 激しく / 徹底的に」のような様態 (特に密着性) を表す表現が語義 [3] [4] に多く見られた。後者の様態の表現は、「密着マーク / 徹底マークする」のような複合名詞 (5例) が語義 [4] に見られたこととも一致する。

以上の連用成分の共起の状況をふまえ、10%の用例への出現を目安としてそれぞれの語義の典型的な文型を示したものが、次の〔表4〕である ([] は名詞、《 》は副詞的成分を表す)。

〔表4〕「マークする」の語義と文型

語	義	文 型	例
[1] 印を作る	印をつける / 強調する	[場所] {ヲ / ニ} ([道具] デ)	回答欄 {を / に} (鉛筆で) マークする。
[2] 記録する	記録・成績を打ち立てる	[数値 / 記録の種類] ヲ 《(時) (ニ)》 ([場所] デ)	田中選手は (2000年 (に) 国際大会で) 世界新記録を マークした。
[3] 注意する	注目・注視する / 注意を払う・警戒する	[人] ヲ 《(役割) トシテ》 《(期間)》 《(様態)》	警察は 彼を (容疑者として 先月から 徹底的に) マークしている。
[4] 人に付く	尾行・追跡する / 周囲に貼り付く	[人] ヲ 《(期間)》 《(様態)》	鈴木選手は 相手選手を (最後まで びったり) マークした。

3.2.2 文末形式

次に、助動詞やテ形補助動詞のような、「マークする」に後接する文末形式の特徴を見る。〔表5〕に、2例以上見られた文末形式を挙げる。参考情報として、表右端の「スル略」に、活用語尾「する」を伴わず「マーク」に句読点や記号が直接続く例の数値を示した。

〔表5〕「マークする」の文末形式

語義	用例数	受身	使役	テイル	テオク	テホシイ	ヨウ	スル略
[1] 印を作る	51	4		4		1		2
		7.8%		7.8%		2.0%		3.9%
[2] 記録する	180			13				54
				7.2%				30.0%
[3] 注意する	64	23	1	26				1
		35.9%	1.6%	40.6%				1.6%
[4] 人に付く	79	13	2	21	2	1	3	3
		16.5%	2.5%	26.6%	2.5%	1.3%	3.8%	3.8%
計	374	40	3	64	2	2	3	60

まず、受身の助動詞「(ラ) レル」に関しては、語義 [3] で後接する率が高い。これは、先に(2) で見た佐々木 (2001) の記述を裏付けるものである。受身形の割合は語義 [4] も高いが、これらの

語義の「マークする」は〔人〕をヲ格としてとるため、「〔人〕が〔人・組織〕にマークされる」という受身文が作りやすいのだと考えられる。これらの受身文の例では、監視や付きまといに対する不快感や、それによって生じる困難といったニュアンスを伴うことが多い。

次に、「テイル」の後接率に関しても語義〔3〕と〔4〕が高く、語義〔3〕では「受身+テイル」の割合が最も高い（14.1%）。この語義〔3〕と〔4〕のテイル形は、すべていわゆる「継続・進行」解釈の例である。このことは、3.2.1節で見た《期間》を表す副詞との共起とも一致する。

一方、語義〔1〕のテイル形はいわゆる「経験」もしくは「結果状態」解釈の例であり、語義〔2〕のテイル形はすべて「経験」解釈の例であった。これを見るかぎり、異なったアスペクトの特徴を持つ2種類ないしは3種類の「マークする」が存在することになる。

興味深いことに、語義〔2〕では受身形の例が見られなかった。そもそも、語義〔2〕の「マークする」には「テイル」以外の文末要素が後接せず、この語義の「マークする」は原則として基本形（終止形）で使われると言ってよい。このことは、〔表5〕の右端に示したように、活用語尾「する」が省略された例が語義〔2〕に顕著に多いことと相関していると考えられる。

3.3 分析

以上のBCCWJの用例の観察に基づけば、外来語サ変動詞「マークする」には、その「意味」（語義）ごとに異なった「形」（文型）をとるといふ、一定の意味と形式の対応関係が存在することが指摘できる。

この対応関係は、まず、意味的に連続性を持つ語義〔3〕と〔4〕（3.1節参照）において、構文的にも類似性が見られるという形で現れていた。つまり、「意味が似ている使い方には形式的な類似性が見られる」ということである。

一方で、語義〔3〕〔4〕と語義〔1〕および〔2〕との間には、それぞれ構文的な差が見られた。特に連用成分に関しては語義ごとに共起のあり方が異なっており、「意味が違う使い方には形式的な違いが見られる」という関係として捉えることができる。

4. 類義表現との比較

最後に、「マークする」とそれに類する表現との共通点・相違点について見ていく。

4.1 「マークする」と「マークをつける」

先に(2)で見た佐々木(2001)では、語義①（ここでの語義〔1〕）の記述に「マークをつける」という表現が挙げられていた。では、語義〔1〕の「マークする」と「マークをつける」は同義と言ってよいだろうか。

まず、BCCWJに2例以上見られた「印」を意味する名詞「マーク」（複合名詞を除く）+格助詞ヲ+動詞」という構成の表現を、次の(8)に示す（以下、【 】内に用例数を示す）¹⁰⁾。

- (8) マークを つける【33】、塗る【5】、描く【4】、書く【3】、貼る【3】、貼付する【2】、隠す【2】

(8)から分かるように、名詞「マーク」は、何らかの印を作成する、もしくは付着させる動作を表す動詞と共に起しやすく、特に「つける」の例が多い。ただし、「マークをつける」には、「マークする」と同義にならない場合((9a))と、同義と言ってよい場合((9b))がある。

- (9) a. (略)「私が死んだら棺桶にナショナルのマークをつけてくれ」と言う人がいたと聞いたこともあります。(PB11_00077)
- b. 次にノートの項目同士の関係や何のためにこんなことを書いたのか、つながりの意味が不明な部分は赤でマークをつけておき、翌日、友達や先生に聞きます。(PB33_00141)

(9a)と(9b)の違いは、「マーク」の性質である。(9a)の「マーク」は、記号や商標のような具体的な形をしたものであり、目的の場所に「つける」前から「マーク」として成立している。これに対し、(9b)の「マークをつける」やサ変動詞「マークする」の「マーク」は、ペンを使って引いた線や鉛筆で塗りつぶした楕円形といった比較的単純な形状をした印であり、動作の結果初めて「マーク」として機能することになるものであると言える。

4.2 「マークする」と「記録する」

語義[2]の「マークする」は、漢語サ変動詞「記録する」に単純に置き換えが可能であるようにも見える。しかし、「記録する」は、「実験方法を記録する」「生活風景をカメラで記録する」のように、ヲ格名詞が必ずしも「何らかの基準以上の顕著な数値や事実」を表さないという点において、「マークする」と異なっている。では、両語と共に起する「顕著な数値や事実」に何らかの違いはないのだろうか。

ここでは、語義[2]の「マークする」と比較することを目的として、「顕著な数値や事実」をヲ格にとる「記録する」に限定して用例を見ていく。まず、この条件を満たす「マークする」と「記録する」のサブコーパスごとの分布を示すと、次ページの〔表6〕のようになる。

ここから、「記録する」の方がより多様な媒体(サブコーパス)に出現すること、また、新聞では両語ともPMWが高いが、白書では「記録する」がさらに多く出現することが見てとれる。

次に、両語と共に起するヲ格名詞を頻度上位15種類まで挙げると、次の(10)–(11)のようになる。3.2.1節で触れた名詞のタイプで分けると、それぞれaが記録や成績の[具体的な数値]の例、bが[種類を表す名詞]の例である(aのうち助数詞を伴わない数値表現は〈 〉で、bのうち複合名詞等はカッコ内に語例を添えて示す)。

- (10) 「マークする」(語義[2])と共に起するヲ格名詞：

- a. 「～秒」など(タイム)【15】、～勝【13】、「～km/h」など(速度)【12】、〈スコア(ゴルフ)〉【7】、「～m」など(飛距離)【6】、～連勝【6】、～本塁打【5】、「～割」など(打

〔表6〕「マークする」と「記録する」の分布

	マーク[2]	PMW	記録	PMW
出版・書籍	35	1.23	118	4.13
出版・雑誌	36	8.10	63	14.17
出版・新聞	40	29.19	46	33.57
図書館・書籍	8	0.26	104	3.42
特定目的・ベストセラー	0	0	7	1.87
特定目的・広報誌	1	0.27	8	2.13
特定目的・教科書	0	0	1	1.08
特定目的・白書	0	0	192	39.32
特定目的・国会会議録	0	0	12	2.35
特定目的・知恵袋	0	0	8	0.78
特定目的・ブログ	60	5.89	148	14.52
計：	180	1.72	707	6.74

率)【4】、～点(得点)【4】

- b. タイム(「好-」「トップ-」など)【12】、記録(「世界-」「新-」など)【9】、率(「視聴-」「打-」など)【8】、得点(「高-」など)【5】、新(「自己-」「日本-」など)【4】、数字(「高い-」など)【4】

(11)「記録する」と共起するヲ格名詞：

- a. ～%【52】、「～円」など(通貨単位)【26】、～位【23】、～人(人数)【22】、「～km/h」など(速度)【21】、震度～【14】、～度(気温など)【12】
- b. 最高(「過去-」「戦後-」など)【66】、率(「成長-」「視聴-」「失業-」など)【47】、ヒット(「大-」など)【21】、成長(「経済-」「マイナス-」など)【19】、値(「最高-」「超安-」など)【18】、売り上げ【14】、最低(「過去-」「戦後-」など)【12】、セールス(「好-」など)【11】

これらの語例から分かるように、「マークする」と共起するヲ格名詞には明らかにスポーツに関わる語が多いのに対し、「記録する」のヲ格名詞には気象や経済に関わる語が複数見られ、より多様な名詞と共起していると言ってよい。

また、「記録する」のヲ格名詞には、「過去最低」「マイナス成長」のように程度「低」を表すもの、「失業率」のようなマイナスのニュアンスを伴うものが見られるのに対し、「マークする」のヲ格名詞は「よい成績」を表すプラス評価のものに偏っている。

これらのことから、語義[2]の「マークする」が「人間の力で努力した結果、顕著な数値や事実を生じさせる」という意味を内包しているのに対し、「記録する」は人為の及ばないさまざまな現象についても描写できると言える(相澤正夫氏のご指摘による)。先に〔表6〕で見たように、白書では「マークする」ではなく「記録する」が選択されていた。これは、このような語の意味と、社会の

現状や動きを報告する公的な文書という白書の媒体としての性質とによるものと考えられる。

なお、例えば「高視聴率を記録する」の動詞を「マークする」に入れ替えると、同じ「顕著な数値や事実」であっても語り方が軽いという印象を受ける。そもそも使用される話題がスポーツに偏っているということもあるが、語義 [2] の「マークする」が新聞、雑誌、ブログ以外の媒体に現れにくいのは、このような文体的特徴の影響も考えられる。

5. おわりに

本稿に先行する茂木 (2011) およびMogi (2012) では、多義的な外来語サ変動詞「カットする」が語義ごとに異なる構文をとることを明らかにし、この語の意味と文の形には一定の対応関係が認められることを示した。また、このことは、「形から意味が、意味から形が、ある程度予測できる」ことを意味しており、このような対応関係は日本語学習上の手がかりになりうることを指摘した。

本稿では、同じく多義的な外来語サ変動詞「マークする」の分析を行い、第3節で示したように、格成分や副詞的成分といった連用成分との共起のあり方と、動詞に後続する文末形式の分布のそれぞれにおいて、「マークする」にも同様の対応関係が見られることを明らかにした。

また、第4節では、語義 [1] の「マークする」と「マークをつける」、語義 [2] の「マークする」と「記録する」との比較を行うことで、「マークする」と類義表現との間の意味的な差が、共起する名詞から見えてくることが明らかになった。このことは、外来語サ変動詞と類義表現との比較を行う研究の必要性とともに、教材や意味説明などで安易に類義表現との置き換えをすることの危険性を示していると言える。

今回の分析で最も興味深いふるまいが見られたのは、出現頻度が最も高い一方で、出現媒体や形態・構文が特徴的な語義 [2] の「マークする」である。ただし、この「マークする」のように頻度は高くても使用状況が限定される用法を教育上どのように扱うべきなのかは、別の尺度に基づいて判断する必要がある。例えば、学習者として高校生や大学生を想定するならば、むしろ、試験の場面に関わる語義 [1] の情報の方が重要であると言える (cf. 山内2013)。

今後、さらに外来語に関する分析を続けていくことで、どのような「形」の情報の記述が必要であるのかを明らかにするとともに、その知見をどのように応用につなげるのかについても検討していく予定である。

謝辞

本稿は、第4回コーパス日本語学ワークショップ (2013年9月5日、於：国立国語研究所) における同タイトルの発表内容に、加筆・修正を行ったものである。発表時に有益なコメントをくださった方々に御礼を申し上げる。

なお、本稿は、日本学術振興会科研費若手研究 (B) 「日本語教育用辞書作成に向けた「外来語の文法」の記述的研究」 (研究課題番号：25870484) および国立国語研究所共同研究プロジェクト (基幹型) 「コーパス日本語学の創成」 (代表者：前川喜久雄) の成果である。

注

- 1) 筆者はこれまで、外来語動詞から見た構文の分析 (茂木2011およびその改訂版のMogi 2012) と、外来語名詞から見たコロケーションの分析 (茂木2012) を行ってきた。本稿は前者に続くものである。
- 2) 教師用資料である田中・中山 (2014) の「マーク」の項では、動詞用法と名詞用法の対応など、これよりも精密な記述が行われている。
- 3) 「マークをする」(6例) および「マーキングする」(20例) という形式は扱っていない。
- 4) 『コンサイスカタカナ語辞典 (第4版)』(三省堂編修所2010) には、(1)の⑥に示したように、ここでの語義 [4] から語義 [3] が派生したと読める記述があるが、歴史的経緯については不明である。
- 5) 特定目的サブコーパスのうち、韻文、法律、白書、教科書、国会会議録については用例が見られなかった。なお、「出版・書籍」(PB59_00521) と「図書館・書籍」(LBh9_00173) で同一の用例 (1例) が見られたが、ここでは両方にカウントしている。
- 6) 金 (2013: 31-33) は、『毎日新聞』(2000年) において動名詞「マーク (する)」が高頻度で出現し、スポーツ面に特徴的に分布することを指摘している。
- 7) 具体的には、対象が、1) ハで主題化されている、2) 連体修飾の主名詞になっている、3) 受身文の主語になっている、4) 分裂文の後項になっている、というケースである。[表3] の各語義のヲ格とニ格の欄の共起の割合は、これらを除いて算出した数値を示してある。
- 8) 渡邊 (2008: 7) は、サッカー中継に見られた外来語のうち、「[選手が] [選手を] 他動詞」という文型をとる動詞として、「マークする」を挙げている。
- 9) 『日本語語彙大系』(NTTコミュニケーション科学研究所1997) には、3種類の「マークする」の構文が挙げられており、ニ格、トシテ格との共起がそれぞれ別の構文パターンとして示されている。
- 10) 注3で触れたように、この他に「マークをする」の用例が6例見られた (語義 [1] が4例、語義 [3] と [4] が各1例)。語義 [2] の例がないのは、この語義の「マークする」がヲ格を必須成分としており、いわゆる二重ヲ格制約に抵触するためであると考えられる。

参考文献

- 安藤栄里子・恵谷容子・阿部比呂子・飯嶋美知子 (2014) 『どんなときどう使う日本語語彙学習辞典』, アルク。
- 石野博史 (1996) 「辞典における外来語の語義記述—「オープン」の場合—」『言語学林1995-1996』, pp. 273-286, 三省堂。
- NTTコミュニケーション科学研究所 (監修) (1997) 『日本語語彙大系 5 構文体系』, 岩波書店。
- 金 愛蘭 (2011) 「20世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化」『阪大日本語研究』別冊3, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座。
- 金 愛蘭 (2013) 「外来語動名詞「チェック」の基本語化—通時的新聞コーパス調査と意識調査の結果から—」『現代日本語の動態研究』(相澤正夫 (編)), pp.29-45, おうふう。
- 小宮修太郎 (1997) 「学習者の出身国別に見た外来語の理解度に関する比較考察」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』12, pp.43-62, 筑波大学留学生センター。

- 佐々木瑞枝（監修）（2001）『アカデミック・ジャパニーズ 日本語表現ハンドブックシリーズ5 よく使うカタカナ語』, アルク.
- 澤田田津子（1993）「日本語教育のための基本外来語について」『奈良教育大学紀要（人文・社会科学）』42(1), pp.225-239, 奈良教育大学.
- 三省堂編修所（編）（2010）『コンサイスカタカナ語辞典（第4版）』, 三省堂.
- 小学館辞典編集部（編）（1998）『例文で読むカタカナ語の辞典（第3版）』, 小学館.
- 田中恵子・中山恵利子（2014）「カタカナ語を教えるために—カタカナ語（外来語）の教師用参考書—」〈<http://katakanago.web.fc2.com/>〉（2014年11月1日確認）
- 村木新次郎（1982）「外来語と機能動詞—「クレームをつける」「プレッシャーをかける」などの表現をめぐって—」『武蔵大学人文学会雑誌』13(4), pp.226-211, 武蔵大学人文学会.
- 茂木俊伸（2011）「コーパスを用いた外来語サ変動詞の分析—「カットする」を例として—」『特定領域研究「日本語コーパス」平成22年度公開ワークショップ（研究成果報告会）予稿集』, pp.103-110, 文部科学省科学研究費特定領域研究「日本語コーパス」総括班.
- 茂木俊伸（2012）「文法的視点からみた外来語—外来語の品詞性とコロケーション—」『外来語研究の最新展開』（陣内正敬・田中牧郎・相澤正夫（編））, pp.46-61, おうふう.
- Mogi, Toshinobu（2012）Towards the Lexicographic Description of the Grammatical Behaviour of Japanese Loanwords: A Case Study, *Acta Linguistica Asiatica*. 2(2), pp.21-34, Ljubljana University Press. 〈<http://dx.doi.org/10.4312/ala.2.2.21-34>〉（2014年11月1日確認）
- 山内博之（編）（2013）『実践日本語教育スタンダード』, ひつじ書房.
- 渡邊ゆかり（2008）「サッカー中継で用いられる外来語」『広島女学院大学日本文学』18, pp.1-38, 広島女学院大学文学部日本語日本文学科.